

Title	『百科全書』の無記名項目の執筆者同定：項目「利子、利息Intérêt(Économie politique)」の場合
Sub Title	La question de la détermination de l'auteur des articles non signés dans l'Encyclopédie : le cas de l' >
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.63 (2016. 10) ,p.19- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20161031-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『百科全書』の無記名項目の執筆者同定 ——項目「利子、利息 Intérêt (*Économie politique*)」 の場合——

井 上 櫻 子

2012年のジャン＝ジャック・ルソー、そして2013年のドニ・デイドロの生誕300年と大思想家の記念イヤーが続いたこともあり、2010年以降、18世紀フランス文学研究は一定の盛り上がりを見せているが、近年のフランスにおける動向の大きな流れの一つとして、『百科全書』電子批評版プロジェクト (Projet de l'Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'*Encyclopédie* 略称 ENCCRE) が挙げられる¹⁾。これは、現在閲覧可能な『百科全書』のおもな電子版、すなわち、アメリカのシカゴ大学が管理するArtfl『百科全書』プロジェクトサイト²⁾、フランス国立図書館の提供する電子サイト Gallica³⁾、そして Wikisource 版『百科全書』⁴⁾ にみられるさまざまな問題点への反省にもとづき進められている共同研究である。その最も大きな特徴としては、フランス科学アカデミーの支援を得て、フランス学士院図書館に所蔵される『百科全書』初版を初めて電子化し、その批評校訂版を制作しようとする点にあると言える⁵⁾。研究チームは、文学、思想、歴史学、数

1) <http://enccre.academie-sciences.fr>

2) <https://encyclopedia.uchicago.edu>

3) <http://gallica.bnf.fr>

4) https://fr.wikisource.org/wiki/Encyclopédie,_ou_Dictionnaire_raisonné_des_sciences,_des_arts_et_des_métiers

5) http://enccre.academie-sciences.fr/projet_enccre/projet_enccre_presentation.php

学史、科学史など多様な分野の専門家によって構成され、ジュシュー＝パリ・リヴ・ゴージュ数学研究所における月例研究会を重ねつつ、参照指示をもとにした『百科全書』の項目間における関係性の考察や、詳細な典拠研究が展開されている。そして、その成果は、ダランベールの生誕 300 年にあたる 2017 年に一般公開される予定である。

こうした状況の中、ディドロのような大思想家かつ大編集者と『百科全書』との関連性を探る従来型の研究と並行して、この大事典の完成に際して大いなる貢献をしつつも、これまで十分に光が当てられてこなかった項目執筆者の再評価の動きも次第に顕著になってきている。ジル・バルー、フランソワ・ペパンの編著『ド・ジョクール騎士：17000 項目執筆した男』⁶⁾、そしてオリヴィエ・フェレの一連の論考⁷⁾や、その近著『『百科全書』におけるヴォルテール』⁸⁾に見られるようなジョクール研究の進展は、その典型例である——ENCCECRE のサイトでは『百科全書』は、「ディドロ、ダランベール編」ではなく、「ディドロ、ダランベール、ジョクール編」と記されているのも見逃してはならないだろう⁹⁾。こうした寄稿者たちの項目や著作に目を向ける意義は、決して少なくない。なぜなら、大作家主義にもとづく思想史研究に修正を迫り、『百科全書』という 18 世紀の金字塔が生み出された知的工房の内実を新たな視点から捉え直すことを可能にしてくれるからである。そして、『百科全書』をめぐる諸問題——たとえば、無記名項目の執筆者は誰の筆になるものなのかといった問題——を解決する糸口をも与えてくれることだろう。

6) Gilles Barroux et François Pépin (dir.), *Le Chevalier de Jaucourt : l'homme aux dix-sept mille articles*, Société Diderot, 2015.

7) Olivier Ferret, « La philosophie de l'emprunt : Jaucourt et l'histoire de l'Espagne dans l'*Encyclopédie* », *Recueil d'études sur l'Encyclopédie et les Lumières* (Société d'études sur l'*Encyclopédie*), n° 2, 2013, pp. 181–204.

8) Olivier Ferret, *Voltaire dans l'Encyclopédie*, Société Diderot, 2016.

9) <http://enccecre.academie-sciences.fr> トップページの « Projet ENCCECRE » を参照のこと。

本論考では、こうした無記名項目のなかでも項目「利子、利息« Intérêt »」¹⁰⁾に考察の焦点を絞って、その執筆者同定を試みたい。

I. サン＝ランベールの執筆項目をめぐる諸問題

『百科全書』の執筆者に関する書誌としては、多くの研究者がJ. ラフ『デイドロとダランベールの「百科全書」試論』¹¹⁾ R. A. シュワップ、W. E. レックス、J. ラフの『デイドロの「百科全書」目録』¹²⁾、そしてF. A. およびS. カフカ『個人としての百科全書派』¹³⁾を参照してきた。とりわけ『目録』は、項目の執筆者検索のために最もよく活用される文献といってもいい。たとえば、先述のシカゴ大学 Artfl サイトに記された執筆者情報も、本書の情報にもとづいたものとなっている。しかしながら、この『目録』にも「執筆者不明」として残されている項目が少なからず存在する。『百科全書』の無記名項目の執筆者を割り出すのは決して容易なことではない。なぜなら、この大事典の印刷が終了した時点で、その草稿はすべて印刷業者によって廃棄されてしまっているからである。

こうした無記名項目の中でも、執筆者同定に最も誤解や混乱を生んだのがジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベールの筆に成る項目である。というのも彼は、『百科全書』に寄稿するに際して、一貫して匿名性を守ったからである。そのため、18世紀における経済学的发展をたどる上で早くから重視されてきた項目「奢侈」(第9巻所収)を除いては、百科全書派としての

10) « Intérêt », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, pp. 825–827.

11) John Lough, *Essays on the Encyclopédie of Diderot et D'Alembert*, London, New York, Toronto, Oxford University Press, 1868. その他『百科全書』をめぐるJ. ラフの重要論考としては以下の2点が挙げられる。*The Encyclopédie*, London, Longman, 1971 ; *The Contributors to the "Encyclopédie"*, London, Grant and Cutler, 1973.

12) R. N. Schwab, W. E. Rex, J. Lough, *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, *SVEC*, 80, 83, 85, 91, 92, 93, 223, 1971–1984.

13) Franck Arthur et Serena L. Kafker, *The Encyclopédistes as individuals : a biographical dictionary of the authors of the "Encyclopédie"*, *SVEC*, 1988.

サン＝ランベールの功績は必ずしも正当に評価されてこなかったと言っている。たとえば、彼の執筆項目である「天才」（第7巻所収）が長らくディドロに帰せられていたという事実は、18世紀学を専門とする者であれば誰しも知るところである。

ところで1980年代なかば、フランソワ・ムローは、サン＝ランベールの執筆項目「奢侈」の草稿研究をもとに、きわめて示唆的な見解を公表した¹⁴⁾。18世紀の草稿研究の権威であるF.ムローは、サン＝ランベールの残した自筆ノートの発見をもとに、このロレーヌの詩人が『百科全書』に寄稿した執筆項目は、ジョン・ラフによって同定された16項目よりもはるかに多く、右表の27項目にのぼると主張しているのである¹⁵⁾。

実は、草稿研究をもとにF.ムローが新たにサン＝ランベールの執筆項目と確定した項目のほとんどは、当初ディドロによるものと推定され、しかもこの仮説はほとんど無批判に受け入れられてきた。しかし、『百科全書』の成立過程、執筆者間の協力関係、そして各項目間の関係性——項目執筆者によって付されている参照指示に頼るのではなく、読解という作業を通して明らかになる関係性——を明らかにするには、「大編集者ディドロ」を支えた寄稿者たちの事績をたどることは不可欠であろう。

18世紀（以前）の作家については草稿が残す習慣が定着していなかったから、F.ムローのように、作家の残した自筆ノートの発見をもとに『百科全書』無記名項目の執筆者同定が可能となるケースは、きわめてまれである。しかし、その一方で寄稿者の遺した主要著作と『百科全書』とを突き合わせることによって、項目執筆者の割り出しを行うという方法も、十分有効な手段である。そしてそれこそは、サン＝ランベールのように同時代の読者には高い評価を受けつつも、歴史の流れの中で次第に忘れ去られていった作家、思想家の著作に立ち返ることを意義付けるものなのである。

14) François Moureau, « Le manuscrit de l'article < Luxe > ou l'atelier de Saint-Lambert », *Recherche sur Diderot et l'Encyclopédie*, n° 1, 1986, pp. 71–84.

15) *Ibid.*, p. 73.

項目名	分類符号	同定者
Familiarité (t. VI)	(<i>Morale</i>)	Lough
Fantaisie (t. VI)	(<i>Grammaire</i>)	Lough
Faste (t. VI)	(<i>Grammaire</i>)	Lough
Fermeté (t. VI)	(<i>Grammaire et Littérature</i>)	Lough
Flatterie (t. VI)	(<i>Morale</i>)	Lough
Fragilité (t. VII)	(<i>Physique</i>)	Lough
Frivolité (t. VII)	(<i>Morale</i>)	Lough
Génie (t. VII)	(<i>Mythologie. Littérature antique</i>)	Lough
Honnête (t. VIII)	(<i>Morale</i>)	Lough
Honneur (t. VIII)	(<i>Morale</i>)	Lough, Moureau
Humanité (t. VIII)	(<i>Morale</i>)	Moureau
Hypocrite (t. VIII)	(<i>Morale</i>)	Moureau
Intérêt (t. VIII)	(<i>Morale</i>)	Lough
Législateur (t. IX)	(<i>Politique</i>)	Lough
Louange (t. IX)	(<i>Morale</i>)	Lough
Luxe (t. IX)		Lough
Magnanime (t. IX)	(<i>Morale</i>)	Moureau
Maintien (t. IX)	(<i>Grammaire et Morale</i>)	Moureau
Malice (t. IX)	(<i>Morale. Grammaire</i>)	Moureau
Malignité (t. IX)	(<i>Grammaire</i>)	Moureau
Manières (t. X)		Lough
Martyr (t. X)	(<i>Théologie</i>)	Moureau
Méfiance (t. X)	(<i>Grammaire et Morale</i>)	Moureau
Mélancolie (t. X)	(<i>Économie animale</i>)	Moureau
Mérite (t. X)	(<i>Droit naturel</i>)	Moureau
Mercenaire (t. X)	(<i>Grammaire</i>)	Moureau
Transfuge (t. XVI)		Moureau

II. 『四季』「冬」の注記と『百科全書』

『百科全書』本文全17巻完結から4年後に刊行されたサン＝ランベールの主要著作『四季』の初版（1769）には、この大事典の項目に関する明示的言及が散見される。まず、第二歌「夏」の注記には、自分が項目「態度、作法 « Manières »」の執筆者であるという言明¹⁶⁾——ただし、『百科全書』の項目と『四季』を照合すると、サン＝ランベールが執筆したのは、「態度、方法 « Manières »」ではなく、「方法、流儀 « Manière »」であることが判明するのだが——と、大事典からの引用¹⁷⁾が見出される。そして、第四歌「冬」の注記には、以下のような一節が織り込まれているのである。

他のところですでに述べたことをここで繰り返すまい。『百科全書』の項目「立法者」および「金銭の利子」参照のこと¹⁸⁾。

参照指示を記しているところなどは、『百科全書』のスタイルを踏襲しているようにも映るが、ともかくもここで注目したいのは、項目執筆時は匿名性を守っていたサン＝ランベールが——その執筆項目がはじめて登場するのは1756年に刊行された第6巻である¹⁹⁾——、1769年の『四季』初版出版時には、自ら大事典への寄稿者だと明かしているという事実である。もっとも『百科全書』の項目執筆者であるとするこうした二つの言明は、1771年に刊行された『四季』増補版からは削除されてしまうのだが、それでも、『百科全書』の編集者たちは人類に不滅の貢献をした²⁰⁾という一節——この一節

16) Jean-François de Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème, texte établi et annoté par Sakurako Inoue*, Classiques Garnier, STFM, 2014, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Été » », p. 169.

17) *Ibid.*, pp. 169–170.

18) *Ibid.*, « Notes de Saint-Lambert, sur « l'Hiver » », p. 294.

19) 上掲の一覧にあるように、「Familiarité」(t. VI, p. 390)が最初に登場する執筆項目である。

20) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Hiver » »,

は生前最後の版まで残される——も含めて、百科全書派としてのサン＝ランベールの意識が、1760年代後半において次第に高まりつつあったことは確かであろう²¹⁾。

そして先の一節から得られるもう一つのきわめて重要な情報、それはサン＝ランベールが項目「金銭の利子（経済学）« Intérêt d'argent »」の執筆者だと主張している点である。実は、サン＝ランベールの主張に従い、『四季』の注記と『百科全書』を読み比べてみると、これまで執筆者不明とされてきたある一項目が、ロレーヌの詩人の筆に成るものであることが次第に明らかになるのである。

先の一節が織り込まれた『四季』「冬」の注記の中で詩人が取り上げているのは、万人の幸福と富、そして良き法との関係性という問題である。

市民はどれほど富と熱意を持っていようとも、ごく限られた財をなすことしかできない。万人の幸福＝富 « bien général » を生むのは良き法である。小麦流通の自由、金銭の利子の引き下げによって、王国じゅうで農業が再活性化したのだ²²⁾。

残念ながら、『百科全書』には「金銭の利子 « Intérêt d'argent »」という項目そのものは存在しないものの、「« Intérêt »」を見出し語に含む項目は17件認められる。「面白み、興味（文学）」はディドロ、「利益（代数学、算術）」はダランベールとラリエ・デ・ズルム、「利子（法律学）」およびその関連項目はブシェ・ダルジとほとんどの見出しについて執筆者記号が記されてお

p. 289.

21) 1764年にサン＝ランベールが刊行した『奢侈論』の内容が、『百科全書』の一項目「奢侈」として組み込まれることを利用し、グリムがこの大事典の刊行再開に際して販売促進活動を行ったことも忘れてはならないだろう (Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Albin Michel, 1995, p. 67)。

22) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Hiver » », p. 294.

り²³⁾、無記名項目は冒頭の見出し「関心、利益（道徳）」²⁴⁾と一番最後の見出し「利子、利息（経済学）」²⁵⁾に限られる。ところで項目「関心、利益（道徳）」については、18世紀末から19世紀初頭にかけて刊行された『サン＝ランベール思想著作集』²⁶⁾第6巻に彼の執筆項目として掲載されている²⁷⁾。R. A. シュワップとJ. ラフの『目録』には、本項目がサン＝ランベールによるものと記されているが、おそらくこれは『思想著作集』の情報をもとにしたものであろう。ただし、項目「関心、利益（道徳）」では、この語がしばしば誤って「利己心 « amour-propre »」と同義の語として用いられると述べたのち²⁸⁾、多くのモラリストが非難する「利己心」の有益性を示すことに論点がシフトしてしまっており、経済に関する議論はまったく見出されない。ここから、サン＝ランベールが自分の執筆項目だと主張している「金銭の利子」とは、むしろ「利子、利益（経済）」ではないだろうかという推測が立てられるのである。

Ⅲ. 『四季』と項目「利益（経済学）」、「立法者」

項目「利子、利息（経済）」に目を通してみよう。冒頭で、まず筆者は「利子」とは「法に定められた金額」であり、「高利貸しの利子」とは異なることを明確にしているが²⁹⁾、ここから、項目執筆者が高利貸し業から得られる利益を悪徳とみなすキリスト教的道徳観とは距離を置き、理にかなった利率が保たれる限りにおいて、「利子」の必要性に一定の理解を示しているさまがうかがえる。実際、この項目では、妥当な利率の保持がいかに国家の繁

23) « Intérêt (*Littérature*) », t. VIII, p. 819, « Intérêt (*Algèbre, Arithmétique*) », t. VIII, pp. 819–823. そして、« Intérêt (*Jurisprudence*) » とその他関連項目は t. VIII, pp. 823–825.

24) « Intérêt (*Morale*) », t. VIII, pp. 818–819.

25) « Intérêt (*Économie politique*) », t. VIII, pp. 825–827.

26) *Cœuvres philosophiques de Saint-Lambert*, H. Agasse, 6 vols. 1796–1801.

27) *Ibid.*, t. VI, pp. 45–54.

28) « Intérêt (*Morale*) », t. VIII, p. 818.

29) « Intérêt (*Économie politique*) », t. VIII, p. 825.

栄に不可欠であるかという問題をめぐって議論が展開されている。ここで執筆者は、金銭の流通は「農業、産業、商業」³⁰⁾という三つの活動を介して展開されるが、そのなかでも農業が最も重要な役割を果たしているという前提を述べた上で、以下のように主張している。

しかし、金銭はその利益が土地から得られる収益、商業や産業による利益と釣り合っていない場合、農業、産業、そして商業を害する可能性がある³¹⁾。

このように物価と金銭価値の適正バランスが守られる必要性について述べたのち、項目執筆者はアンリ 4 世の治下にシュリー³²⁾、さらにルイ 13 世の治下にコルベールが³³⁾「金銭の利子 « Intérêt d'argent »」を下げたことで経済復興をはかったことを紹介し、こう締めくくっている。

シュリー大臣のもと、どれほど農業が栄えたか、コルベール大臣のもと、どれほどわが国のマニュファクチュアがどれほどの水準に達したかは、皆が知るところである³⁴⁾。

こうした歴史上の成功例や、さらにはイギリスやオランダ、帝国都市ハンブルクといった隣接する国々や都市の繁栄を踏まえつつ、項目執筆者は以下、「金銭の利子」を減らす時期に差し掛かっていることを示唆した上で、同時に極端な引き下げを提唱するのではなく、実現可能な引き下げ利率を 5 パーセントとみなし、この適正な利率を法の力で維持、実行する必要性を強調し

30) *Ibid.*

31) *Ibid.*

32) *Ibid.*

33) « Intérêt (*Économie politique*) », t. VIII, p. 826.

34) *Ibid.*

ている³⁵⁾。

このように法に基づく利子の引き下げと経済の復興、とりわけ農業の発展に不可欠であるとする主張は、「良き法が万人の幸福＝富を生み」、「金銭の利子の引き下げによって、農業が再活性化」するという『四季』の注記の一節と照応するものだと言える。こうした事実がこれまで見逃されてきた理由の一つとして、初版刊行以降、作者サン＝ランベール自身の加筆修正作業が重ねられてきた『四季』については、作者の生前最後に刊行された1796年版を尊重する傾向があまりにも強かった結果、初版の記載内容が見落とされたということが挙げられよう。これまでフランス文学研究においては、作者の生前最後に出版された版を「底本」として校訂版を制作するのが一般的とされてきた。しかし、ヴォルテールやサン＝ランベールのように、再版に際して何度も作品に手を入れる傾向のある作家については、こうした従来型の「底本」の選定方法が妥当であるか、検討の余地があるだろう。

それでは、もう一つ、『四季』の注記で言及されている『百科全書』の項目「立法者」についてはどうだろうか。残念ながら、先の一節にあるような「小麦の自由流通」の必要性という1776年のチュルゴの勅令を先取りするかのような議論は『百科全書』の項目「利子」や「立法者」には見出されない。しかしながら『四季』「冬」の別の注記における『百科全書』礼賛の一節と項目「立法者」の間には、商業の効用をめぐる似通った議論が展開されている。

商業が広がり、交易が展開されることで富が生まれ、それが言わば、あらゆる国の機動力となっている。ある国民の破滅はほかのすべての国民の破滅につながり、荒廃はもはや戦争の結果ではなく、戦争は日に日に少なくなるはずだ³⁶⁾。

35) *Ibid.*

36) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur < l'Hiver > », pp. 286–287.

このように商業の発展に伴い、戦争が少なくなるという議論は、『百科全書』の項目「立法者」の次の一節と結びつけることができよう。

あらゆる人々、あらゆる国家が、あらゆる産業の成果とその土地の生産物の交易のために必要となった。商業は、人類にとって新たな絆となり、今日ではそれぞれの国にとって、他の国がその富、産業、銀行、奢侈、農業を保持するのは意義があることなのである³⁷⁾。

実は、項目「立法者」との共通項が見出されるのは、「冬」の注記に限ったことではない。第二歌「夏」の注記では、詩人は特にことわり書きも参照指示も記すことなく、項目「立法者」において展開した気候と人々の気質の違いに関する考察をほぼそのまま転記しており、しかもこの一節については1796年に刊行された最後の版まで保持されるのである³⁸⁾。確かに1771年に刊行された改訂増補版以降、初版に認められた「夏」および「冬」の注記における『百科全書』の項目への明示的言及は削除されてしまう。しかしその一方で、1771年の改訂増補版には新たに項目「立法者」の一部の議論が再録されているという事実からは、詩人が一貫して改訂版出版『百科全書』の寄稿者としての自負の念を持ち続けていることが確認できる。これまで作家サン＝ランベールの功績に関しては、『四季』をもって描写詩という18世紀特有のジャンルを確立したという点が文学史のテキストにごく簡潔に紹介されるにとどまり、百科全書派としての貢献についてはあまり注目を集めてこなかった。しかし、両作品が1750年代から60年代にかけて並行して執筆されたものであり、そして『四季』に『百科全書』執筆時から一貫して支

37) « Législateur », t. IX, p. 362.

38) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur < l'Été > », pp. 174–175. « Législateur », t. IX, pp. 357–358.

なお、この問題については以下の拙稿で論じている。Sakurako Inoue, « Jean-François de Saint-Lambert, lecteur et collaborateur de l'*Encyclopédie* : autour d'une note sur < l'Été > des *Saisons* », 『『百科全書』・啓蒙研究論集』(『百科全書』研究会)、第2号、2013年、pp. 115–130.

持してきた主張が織り込まれていることを考慮に入れると、二つの作品を重ね合わせながら読解を進めることによってこそ、作家、思想家としてのサン＝ランベールのメッセージをすくい取ることが可能になると言えよう。

それでは、『四季』と『百科全書』の諸項目を読み比べることで今後どのような成果が期待されるか。現時点で予測されるもっとも大きな結果としては、道徳思想家としてのサン＝ランベールの姿を浮き彫りにできるということが挙げられる。先に挙げた一覧からも分かる通り、現在サン＝ランベールの執筆項目として判明している項目の多くは、道徳関連として分類されるものである。そして、『四季』の注記にも感受性をめぐる議論が随所で展開されている。実際、「冬」に加えられた最後の注記では、人間の幸福な共同生活を保持する上での「人類愛」や「博愛心」といった感情についての考察が展開されているが、これらは『百科全書』の項目「立法者」におけるあるべき立法者の姿についての考察や、項目「人類愛 « L'Humanité »」との比較検討が可能であると考えられる。そしてこうした作業から、『百科全書』におけるサン＝ランベールの執筆項目間の関連性、さらには彼の晩年の道徳論『普遍のカテキズム』の生成過程をも明らかにすることができるだろう。

サン＝ランベールは、現在では忘れ去られた作家であるものの、道徳的感情に裏打ちされた社交性が何よりも尊ばれた18世紀の文芸サロンで大変な人気を博した人物である。その道徳論に目を向けることで、『百科全書』の生成過程のみならず、彼と親交の深かったデイドロやエルヴェシウスの人間論についても、新たな視点から捉え直すことが可能になるかもしれない。

付記：本研究成果は、平成28年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号26370366)の助成を受けたものである。